

暑い夏の束の間の休日。涼風が吹き抜ける座敷に並ぶ「ご先祖さま」のお位牌に向かって合掌していると、「失われた過去」が不意に蘇ってくるようです。

忘れず、活かし、伝える

近頃、父を知る人達に、

「お父さんにそっくりになって来られたネエ」と言われる事がふえました。

生きている時は、何かと反発心でしか接することのできなかつた父（師匠）でしたが、ちよつとした表情、しぐさ、声音がそっくりになつてきていることに我ながら驚かされます。今私が生きているのは、祖父、祖母、親



命あつてのものです。

お盆を機会に、身近な人々や先祖と自分が似ていないか、考えてみてはいかががでしょうか。それはきつと、あなたが誰かから、

ています。と不安そうにお葬式の席で言われた方もいます。

2050年には、日本の人口は1/3の4000万人が減つてしまうのだとか—これからの時代が、どのように変容していくのか、全く先が読めません。

お墓つてなあに

ご供養つてなあに

私が以前、保育園の園長をしていた折、父兄から「亡き父の供養をしてもらいたいのだけれど」との依頼がありました。話しを聞くと、お父さんの遺言で、お父さんの骨は相模湾に散骨したというのです。しかし父を懐かしく思い、いざ御供養をしたいと思つた時、どこで、どういう手順で供養をすればよいのかわからないというのです。地中に埋もれ、地上に姿は現していないけれど、草木には根つこがあるから、そのおかげで生命の花が咲くのです。

何かを受け継ぎ、活かしている証拠。それをよりよい形で、次の世代に伝えていこうではありませんか。

「忘れず、活かし、伝える」

亡くなつた方への何よりの御供養となることでしょうか。

これからの時代

以前、何かの折に、これからの人達は、

葬儀とか仏の供養をする人が少なくなるのではなからうかという意見が出ました。

確かに今、家族葬という形態のお葬式がふえました。隣り近所、趣味の仲間、夥しい時は親戚であつても亡くなつたという通知も無く、お別れの言葉一ツかけられなかつたという話しも聞きます。残された者の意志だけでなく、日頃から、配偶者や子供達周りの人達に迷惑をかけたくないからと故人が望んでいたのも、家族葬にしたのですが、これでよかつたのかしらと、今も思つ

国や家 一木一草に至るまで、ものには見えない根があります。そんなお蔭の部分が消えた時、その存在すら不確かなものになつてしまいます。私達は生きていく上で平安で波風たたぬ人生を送りたいと希望しますが、長い一生の間には何度となく迷いや苦しみの淵に立たされます。そんな、人が迷つた時、苦しんだ時、生命の根源である親、大きな力に向かつて対話を試みます。又年をとつて死を意識した時、自分が行くところする死の世界に、わが親が、わが子が待つていてくれる、み仏さまのあたたかい御胸にすがつていけるといふ安心感がなかつたら、死とは恐怖だけの世界なのではないでしょうか。

「どうせ死んでしまつたら、この肉体は魂の抜けがらだから、お墓に骨を入れて骨を挿んだつてどうしようもないと思ふんですヨ。だから私は母の葬式もするつもりも

ないし、私自身、散骨してくれと、今のうちから妻子に言っているんですヨ」と、信仰を持ってないという理由で、檀家さんの中にお墓をはらわれた人がいます。

宗教的信仰がもてないという共産主義的唯物思想は、私も学生運動が盛んな時、充分勉強したので、その唯物的なものの考え方はそれはそれで立派な信仰であり、その人を大層正直な人だと思います。

ただ人間は、水分90%そしてカルシウムミネラル等で構成されているのも事実ですが、それだけのものではありません。それ以上の、ものとしてでなく、一人の生命の尊厳があるのだと私は思うのです。肉体を単なる物としてみるのか、尊厳なる生命とみるのかということは、お墓も又単なる石ころとみるのか、拝む対象とみるのかどうか、自分自身の価値をその中に写しているように思います。

ずに来られているのを見るにつけ――。いつかはお墓に私達も入るのです。お墓参りに来た人達が心から、御供養をしてくれる人に、私達もなりたいたいものだと思います。そしてそれは、生きているうちの生き方によるのだとつくづく思います。亡くなった人のためだけにではなく、生きている私達にこそ、お墓は必要なのだという思いがすることです。

お寺から

お施餓鬼会の際、境内入口に置かれた、大きな大きな丸太をみて、法要に随喜されるお坊さま方も驚いておられました。この日いらした多くの参拝の檀信徒の皆様も木にさわり、驚嘆の声を発していらつしやいました。

杉山精一氏の御好意で、今、着々と客殿再建の為の木材が用意されています。

そして

「あなたはそれでよくても、残された者にとって、長い間共に暮らした大切な人の肉体であり、遺骨を、単にカルシウムなどと割り切つて粗末にできるとお思いですか。又粗末にされても仕方のないような生き方をなさつてきたのですか」と問いかけたい思いがします。

一方檀家さんの中に、若くして過労死なさつた弁護士さんがおられます。東京の方で忙しく働いておられたので、その男性とは面識がなかったので、その人の人柄はわかりませんが、友人や仕事を依頼した方々がわざわざ遠方から時を選ばず、今もつてお墓参りに来られるのを見ると、その方の生前の生き方が偲ばれます。又、息子さんを突然の病気で亡くされた御両親が、お二人でお墓を掃除し、花の水を換え、息子さんと一時を共に過ごされる為に、日をあげ

四〇五年後を目標に、檀信徒の皆様になるべく御寄附をおおがずにすむよう、蓄材をして、客殿を再建したいと思つています。長い歴史をもつ総世寺が、名実共に誉らしく又集いの場と思つていただけるよう精一杯つとめようと思つています。

一口伝導板

○明るさを

心に

言葉に

行ないに

○古えの道を聞きても

唱えても

わが行ないに

せすば甲斐なし

